



営農NEWS



ネギの茎葉を加害する微小害虫防除を徹底しましょう

ネギの茎葉に寄生して表面を食害するネギアザミウマは、近年、多発生の傾向が続いて難防除化しています。また、ネギハモグリバエは、幼虫がネギの組織内に食入してその痕が白い線状のスジになり、年5~6回発生を繰り返しますが、近頃は従来とは別系統の虫が出現し、食害が集中して激発すると、葉が白化したような著しい被害になるために問題化しています。ネギコガも幼虫が葉肉内に潜入し、葉の内側から表皮を残して食害するため、不規則な白斑や透明斑となって穴の開くことがあり、5~6月頃から年5~6回発生します。また、アブラムシ類は春と秋に寄生が多くなる傾向ですが、ウイルス病の媒介虫となることがあるので注意が必要です。

このように、ネギの微小害虫が問題化する背景には、常に寄生できる作物のネギなどユリ科作物が周年で産地に栽培されていて繁殖に有利なことや、以前には防除効果が認められていた一部の薬剤に抵抗性が発達してきたことなどが要因と考えられます。さらに、微小害虫は増殖が早く、作物のすき間などに寄生するため薬剤がかかりにくいことや、一度多発生すると薬剤の防除効果が上がりにくいことなどが考えられます。

これらの微小害虫は、高温少雨の気象条件で多発生する傾向がありますので、夏季に向かって、発生初期~少発生のうちに防除を徹底してください。

<防除のポイント>

1. アザミウマ類など微小害虫は増殖速度が速いため、増殖初期に短期間（一週間程度）で2~3回集中して農薬散布を行う防除が効果的といわれています。なお、特効的な殺虫剤を使用する場合は、抵抗性を助長させないためにも分類（コード）の異なる薬剤でローテーション散布を行い、散布後は必ずそれぞれの防除効果を確認してください。
2. ネギは、薬液の付着しにくい作物です。薬液が付着しやすいよう、展着剤を加用します。また、微小害虫は下葉や葉鞘のすき間など薬液のかかり難いところに生息するため、十分量の薬液で株全体に散布することが重要です。

表1 ネギのネギアザミウマ、ネギハモグリバエ、ネギコガ、アブラムシ類の主な防除薬剤 (令和3年5月25日現在)

薬剤名	ネギアザミウマ	ネギハモグリバエ	ネギコガ	アブラムシ類	使用量または希釈倍数	使用時期 / 使用回数	分類
ベリマークSC	○	○			400倍 (0.5ℓ/セルトレイ等※灌注)	育苗後半~定植当日/1回	28
	アザミウマ類	ハモグリバエ類			2,000倍 (0.5ℓ/m ² 株元灌注)	(生育期)収穫7日前まで/1回	
スタークル顆粒水溶剤	○アザミウマ類	○ハモグリバエ類	○		50倍 (0.5ℓ/セルトレイ等※灌注)	定植前日~定植時/1回	4A
ベストガード粒剤	○	○			5g/培土ℓ (育苗培土混和)	播種時/1回	4A
	○	○			6kg/10a (植溝処理土混和)	または 定植時/1回	
	○	○			50g/セルトレイ等※(使用土壌約3~4ℓ)散布	または 定植当日/1回	
	○	○			6kg/10a (株元処理)	(生育期)収穫前日まで/3回以内	
ディアナSC	○アザミウマ類	○	○		2,500~5,000倍	収穫前日まで/2回以内	5
アグリメック	○アザミウマ類	○			500~1,000倍	収穫3日前まで/3回以内	6
ファインセーフフロアブル	○アザミウマ類				1,000~2,000倍	収穫3日前まで/2回以内	-
		○			2,000倍		
グレーシア乳剤	○アザミウマ類	○	○		2,000~3,000倍	収穫7日前まで/2回以内	30
カスケード乳剤	○	○			4,000倍	収穫14日前まで/3回以内	15
ダイアジノン乳剤40	○アザミウマ類				700~1,200倍	収穫21日前まで/2回以内	1B
		○			1,000~2,000倍		
ハチハチ乳剤	○アザミウマ類	○	○	○	1,000倍	収穫7日前まで/2回以内	21A
ベネビアOD	○アザミウマ類	○ハモグリバエ類			2,000倍	収穫前日まで/3回以内	28
ブレバソフフロアブル5		○ハモグリバエ類	○		2,000倍	収穫3日前まで/3回以内	28
スミチオン乳剤	○アザミウマ類		○		700~1,000倍	収穫14日前まで/2回以内	1B
					1,000倍		
アクタラ顆粒水溶剤	○	○		○	1,000~2,000倍	収穫3日前まで/3回以内	4A
					1,000~2,000倍		

- 注) 1. ※印は、セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊(30×60cm・使用土壌約1.5~4ℓ)を略しました。
 2. 薬剤の中には、上記処理以外の登録もあります。各薬剤の成分別総使用回数を超えないよう十分に注意してください。
 3. 分類欄には、IRACコードを記載しました。同一分類(コード)は作用点が同じなので、連用は避けてください。

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。

※JA全農いばらきホームページでもご覧になれます。

